



海だべがど、おら、おもたれば
やっぱり光る山だたぢゃい
ホウ
髪毛（かみけ） 風吹けば
鹿（しし）踊りだじゃい

Photo by (c)Tomo.Yun
<http://www.yunphoto.net>

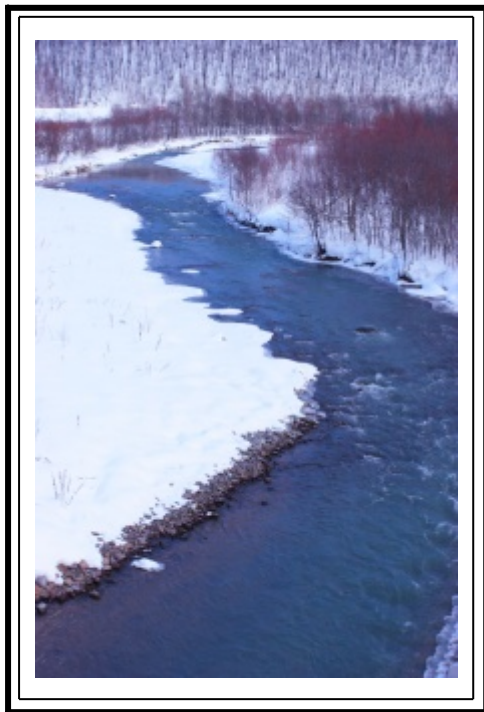
宮沢賢治 「高原」より



根こそぎ抜いて行くやうな人に限って
それを育てはしないのです
ほんとの高山植物家なら
時計皿とかペトリシャーレをもって来て
眼を細くして種だけ採って行くもんです

Photo by (c)Tomo.Yun
<http://www.yunphoto.net>

宮沢賢治



ここに集いあつまった精霊たちよ、
あるいは、地にあるものも、
あるいは、空にあるものも、
まさしく、一切の精霊たちよ、
幸い成れ。

ゴータマ・ブツダ
仏典『スッタニパータ』より

「友だちになる」

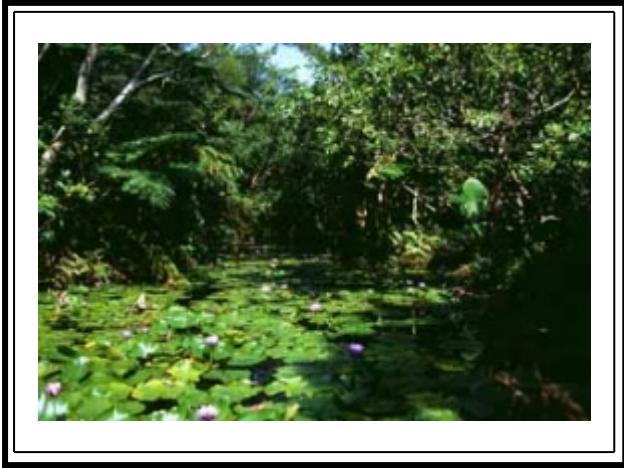
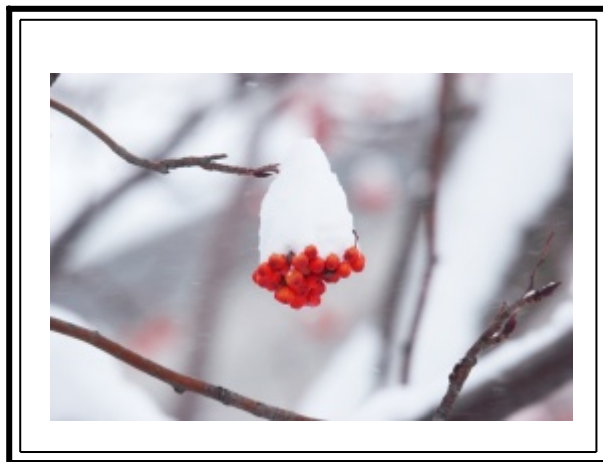


Photo by (c)Tomo.Yun
<http://www.yunphoto.net>

晴れた日に
みまわせば
雲や風や小鳥や虫たちが
「こんにちは光線」を放っている
みたいだ
そこで嬉しく声かける
・・・私「ヒト」です
あなたの お名前は？

工藤直子

「好き」になるのが関心を持つ第一歩。その次はどうしよう？



「雪」
雪がコンコン降る。
人間は
その下で暮らしているのです。

石井敏雄 『山びこ学校』より



「かっこうの」
かっこうのなくこえを聞いて
ふるさとの森のしたの
清水のつめたそうないろなど
おもいだす

矢沢 宰

*Photo by (c)Tomo.Yun
<http://www.yunphoto.net>*



私たちはここまで
速く歩きすぎてしまい、
心を置き去りにして来てしまった。
心がこの場所に追いつくまで、
私たちはしばらくここで
待っているのです。

南アメリカの先住民

私たちが、置き去りにしてきてしまったものはなんでしょうか。

Photo by (c)Tomo.Yun

<http://www.yunphoto.net>

夜明けの歌



黒い七面鳥が
東の方で尾をひろげる
するとその美しい尖端が
白い夜明けになる

夜明けが送ってよこした少年たちが
走りながらやってくる
かれらが穿いているのは
日光で織った黄色い靴

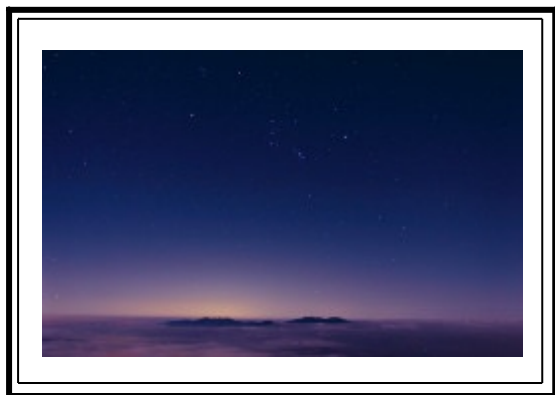
かれらは日光の流れのうえで踊っている

.....

そしていま おれたちのうえに
美しい山々のうえに
夜明けがある

メスカレロ・アパッチ族

アパッチ族にとっては、夜明けは、七面鳥が黒い尾を拡げるその、ちょうどその時本当にやってくるのだ（金関寿夫）



青い夜がおりてくる

青い夜がおりてくる

青い夜がおりてくる

ほら、ここに、

ほら、あそこに

トウモロコシの

ふさが震えている

パパゴ族

「この歌は畑にトウモロコシの種子を植えたあと、その順調な生育を祈って、古来のリズムに合わせた足拍子を踏みながら、何十回、いや何百回となく称えられるのだという。(金関寿夫)」願いの歌なのです。天地の霊に祈る歌なのです。その祈りの力を感じてみましょう。



Photo by (c)Tomo.Yun
<http://www.yunphoto.net>

岩

限りなく遠い むかしから じっと
おまえは休んでいる
走る小路のまんなかで
吹く風のまんなかで
おまえは休んでいる

鳥の糞を身体いっぱいにかぶって
足もとから草をぼうぼうと生やして
頭を鳥の綿毛で飾られて
おまえは休んでいる

吹く風のまんなかで
おまえは待っている
年老いた岩よ

オマハ族

私たちを取り巻く全てに霊を感じます。人だけでなく動物にも植物にも霊を感じます。
そして、岩にも霊を感じています。



Photo by (c)Tomo.Yun
<http://www.yunphoto.net>

死に臨んだとき、私の最後の瞬間を支えてくれるものは、この先になにがあるのかという限りない好奇心だろうね

オットー・ベッテルソン

スエーデンのすぐれた海洋科学者であるオットー・ベッテルソンは、93 才で世を去るまで、彼のはつらつとした精神力は失われなかったといえます。



心から願うなら、
あなたの願いは、
太陽や自然の中の精霊たちが、
必ずかなえてくれるんだよ

ナバホ・インディアン



Photo by (c)Tomo.Yun

<http://www.yunphoto.net>

・・・あらゆる植物は何かの力をもっていて、
その力をもらうには、
静かに、
耳をすましながらそこへ近づいてゆけばいい・・・

アラスカのネイティブアメリカン 『旅をする木』より



すべての物質は化石であり、
その昔は一度きりの昔ではない。
風がすっぽり体をつつむ時、
それは古い物語が吹いてきたのだと思えばいい。
風こそは信じがたいほどやわらかい真の化石なの
だから・・・

Photo by (c)Tomo.Yun
<http://www.yunphoto.net>

『旅をする木』より